CSEAS

京都大学東南アジア研究センターニュース

NEWSLETTER

CENTER FOR SOUTHEAST ASIAN STUDIES, KYOTO UNIV.

（2001年５月１日～2001年10月31日）　№45

第25回東南アジアセミナー

「東南アジアの歴史万華鏡――21世紀を迎えて」開催

第25回東南アジアセミナー「東南アジアの歴史万華鏡――21世紀を迎えて」は、受講者27名の参加を得て9月3日から7日まで開催された。文献史学に限定されない、学際的でフィールドワークを駆使した歴史への視点を交えながら、東南アジア地域の一貫性と多様性を考えようという趣旨のもとで5日間の講義と討論が行われた。前半は、まず自然資源の分布と交易を中心に地域を広域的に把握し、技術や生活から地域の生成過程を歴史的に考えることを企図した。社会・文化的側面からアプローチする後半では、まず言語・芸能・儀礼を通して民族などの集団の歴史意識をたどり、次に正史に記されることのない人々について、その思想と実践を通して別の視点からの歴史を考えることを学んだ。最後に、生態学・歴史学それぞれの立場から地域単位としての東南アジアを歴史的な観点から考察し、今後の東南アジアの研究のあり方を議論した。

《モノの流れ・技術・生活》

濱下武志「東南アジアの交易と他地域との関係史」▽ディアンナ・ドノヴァン「山地資源と東南アジアの交易史」▽赤嶺淳（名古屋市大）「海産資源からみた地域の歴史」▽クリスチャン・ダニエルス（東外大 AA 研）「技術からみた地域の歴史」▽桜井由躬雄（東大）「村落生活からみた地域の歴史」

《集団と歴史意識の表象》

新谷忠彦（東外大 AA 研）「言語の分布と地域の歴史」▽永淵康之（名古屋工大）「儀礼にみる歴史意識」▽馬場雄司（三重県立看護大）「芸能にみる歴史意識」

《思想と実践：書かれざる歴史》

キャロライン・ハウ「マイノリティと歴史叙述」▽林行夫「オーラリティと地域の歴史」▽石井正子（民博地域研）「女性のオーラルヒストリー」

《過去から未来へ》

田中耕司「生態学からみた東南アジア：過去と未来」▽桃木至朗（阪大）「歴史学と21世紀の東南アジア研究」

講師の先生方はそれぞれ多様な角度からテーマに取り組んでくださり、5日間を通じて論点が明確になると同時に、フィールド経験に根ざした具体的な話も聞くことができて、バラエティーとともに一貫性もあったのではないかと思う。今年度は、昨年に引き続きセミナーについてホームページに掲載したこともあり、受講生が大学関係者に限られず、知識や経験の幅も広く多様で、意気込みや熱意が大いに感じられた。　（文責：速水洋子）

その他の主な内容

API Seminar・COE だより …… (2)
東風南信 …… (3)
人事・バンコク連絡事務所だより …… (4)
セミナー参加者感想文・来訪者 …… (5)
Colloquium ……（6～7）研究会報告 …… (7)
Visitors' Views …… (8～10)
Fieldnotes ……（11）出版ニュース …… (12)

API(Asian Public Intellectuals) Seminar on October 19, 2001

In this inaugural year of The Nippon Foundation Fellowships for Asian Public Intellectuals, four Southeast Asian Fellows pursuing research in Japan were invited to participate in a seminar at CSEAS on October 19, 2001, which was opened by CSEAS director Narifumi Maeda Tachimoto.

Phar Kim Beng of Malaysia, a senior foreign correspondent with Singapore Press Holdings, spoke about the Japanese institutions participating in "Asian Track 2 Diplomacy," their relationship with the government, and their potential for the future. While acknowledging that these semi-governmental think tanks have less influence, resources, and independence than private industry think tanks, Phar pointed out their growing importance in informal government-to-government dialogue in the Asia-Pacific region and the need for more research on their role and potential.

Cecilia Dela Paz, assistant professor of Art Studies at the University of the Philippines, Diliman, is pursuing comparative research on ethnographic museums and folk villages in Japan and the Philippines. Her presentation examined the evolution of "mingei," or people's art, based on the aesthetics of use and mediated by museum practice, tourism, and state policy in the context of modernity and globalization. Dela Paz discussed the dichotomy between art and craft, the marginalization of peripheral areas in the master narrative of Japanese representation, and an alternative valuation of "mingei" that seeks to empower peripheral voices in the constitution of Japanese realities and identities.

Colin Nicholas, coordinator of the Center for Orang Asli Concerns, Malaysia, spoke about the problem of intellectual and political leadership in the indigenous communities of Malaysia. With state-driven moves to assimilate them culturally and ecologically threatening the fabric of their society, these communities have embraced "indigenousness" as a convenient and powerful unifying tool with which to pursue political representation. However, genuine indigenous intellectuals are often silenced or despondent, sidelined by those who have moved away from their culture of origin and are motivated mainly by economic self-interest. Nicholas was based at CSEAS for the month of October, before continuing his research on indigenous communities in Thailand.

Nick Deocampo, of the Mowelfund Film Institute, is a leading Filipino independent filmmaker concerned with narratives of Asian identity. Deocampo discussed his findings to date researching cinema in Indonesia and Malaysia, focusing on changing paradigms in the production, transmission, and reception of films. In the wake of financial collapse and in the midst of political and technological change, Deocampo suggested, these cinemas may be at a turning point between the strengthening of corporate production and the flowering of independent film. (Reported by Donna J. Amoroso, Coordinator of this seminar)

COEだより　インターネット・ジャーナルの刊行計画進む

東南アジア研究クラスターは、センターが世界における東南アジア地域研究の中心としての機能をもつこと、またその役割を十分に果たしうるだけの研究支援態勢を整えることを目的に掲げて、プロジェクト当初からこれまでの3年半の期間、さまざまな活動を行ってきた。

その活動のなかで、もっとも重要な課題とされながらなかなか着手できなかったのが、東南アジア研究に関する情報流通の中心としての機能を高めることであった。この点について、センターの研究成果の発信にとどまらず、東南アジア地域内外の研究者やジャーナリスト、文化人などによる東南アジア研究の成果をウェッブ上で公開し、東南アジア地域研究に関する最新情報をレビューするインターネット・ジャーナル（*Kyoto Review of Southeast Asia*：仮題）を年度内に刊行することがこのほど合意された。

これまで欧米諸国や日本などの先進国の研究者が地域研究を担ってきたが、最近では、その対象となった国々の研究者による優れた研究がたくさん現れるようになってきた。なかには、その国の言語で研究成果が書かれているために専門家以外には知られていない業績も少なくない。このような情報をできるだけ早く誌上で公開し、東南アジア域内の研究者の成果を流通させようというのがこの計画の大きなねらいの一つである。

インターネット・ジャーナルの内容は、東南アジアをめぐる今日的な重要課題や関心の高い研究テーマなどの特集記事と東南アジア諸言語で書かれた論文・報告などの英語への翻訳記事などからなる予定である。ジャーナル刊行までには、記事の原稿集めや翻訳など、未解決のさまざまな技術的課題があるが、事務局と東南アジア・クラスターでその実現に向けて一歩を踏み出したところである。

インターネット・ジャーナルの刊行を継続するためのロジスティックをどう準備するか。これも重要な課題である。言うまでもないことだが、5カ年のプロジェクト期間の終了とともにプログラム予算はなくなることになる。特別な予算がなくとも良質のインターネット・ジャーナルの刊行を続けるためには、現段階でできるだけの低コスト化を図っておくのも重要な課題となろう。

早いもので、COE プロジェクトも来年度は最終年度を迎えることになる。COE で播かれた種子をどう育てていくのか、そろそろ「プロジェクト後」をにらんだ活動にシフトしていくことが必要だろう。　（文責：田中耕司）

村　散　歩

桜井　由躬雄

夏の朝7時、村の調査が始まる。隊員がそれぞれ合作社職員に連れられて家や農地、発掘地点に向かう。生け垣と池に囲まれた村道には、農作業や市場に向かう人々で混雑する。道行く人のほとんどが私たちを知っている。ひっきりなしに手を振り、頭を下げて挨拶する。最初は教授とよばれたが、今では伯父さんといわれる。こちらもいいおじさん顔を精一杯振る舞って村道を歩く。8年前から毎年夏、こんなことを続けている。

私は1977年に東南アジア研究センターに入所した。そのころの東南アジア研究の流行は農村調査だった。多くの所員が「自分の村」をもっていた。当時、ベトナムにはどうしても行けない。指をなめながら、先輩たちの活躍を観ていた。

実はそのときには東南アジア研究の主流は村落から離れ、都市やネットワークに遷っていた。それはアジアの奇蹟と喧伝されたころの東南アジア経済の大変貌に平行している。しかし、それでも東南アジア研究の王道は村落調査である。なかでもベトナムはその人口の8割近くが村落に住み、その生活は都市とは極端に異なっている。そしてベトナム人らしさとは農民らしさである。そう思っていた。それから17年もたって、はじめてベトナムの村落調査が許されたとき、天にも昇る心地だった。

実際には村落の生活は、農産物の販売や雑貨の購買、それに90年代の後半では、出稼ぎ労働を通じて外部の市場経済と強く結びついている。だから、一つの宇宙としての村落を書くという夢は、もはや実現できない。

しかし、それでも村は村である。毎日、村の老人たちをそれこそしらみつぶしに訪問している。老人達は腹一杯飯を食べられ、テレビを観られ、小さな家も新築し、なにもいらない、なにも困ることがないという。ぼけっとしていると、地上の楽園と観じてしまう。

やはりベトナムはベトナムである。人々の心の履歴のなかに戦争、革命、病、飢え、がしっかりと刻み込まれている。子を戦いで失った母は思わず泣き崩れ、南に逃げた夫に、残された妻は怒りを隠さない。歴史が人々を規定している。

そして人間は人間である。子供が小さいときは辛かった。年老いてから野菜畑の水やりは苦しく、ハノイに学ぶ子供への送金はあまりにも負担だ。

誰でも辛く、誰でも幸福である。歴史と社会をになった人間たちが、緑の中から無数に私の前に現れ、笑いかけ、泣いている。分析する、記述するという学問行為がいかにも哀れにみえる。私自身もその哀れさと闘いながら、ノートを採り続けている。そして、その感傷が、私を毎年、やはり村に通わせている。

（1977.4～1990.3 東南アジア研究センター助手・助教授。現在東京大学大学院人文社会系研究科教授）

東　風　南　信
REFLECTIONS

センターでの５年

安成　哲三

私がセンターに助手としてお世話になっていたのは、もう20年以上も前のことである。大学院を終えた直後の1977年4月から1982年3月までのちょうど5年間であった。当時、センターに対する学生のあいだの評判は、ベトナム戦争に加担する研究をアメリカの基金でやろうとしていた云々で、すこぶる悪かった。全共闘運動の端くれにいたつもりの私としては、この助手の話が来た時、正直いって戸惑った。かといって、博士課程の3年間をネパールヒマラヤでの気象調査に明け暮れ、学位も持たず他に就職のあてもない身にとって、またとない話でもあった。とにかく来てみると、隣の部室に、同時に赴任した助手がもう一人いた。かつての東大全共闘の闘士でベトナム史をやっている桜井由躬雄氏（現東大教授）だった。以来5年間、氏とは毎日のように、コーヒーと酒とダベリで過ごす仲間になった。さて、センターでは、幸い、良き同僚と上司（？）にも恵まれた。自然系と称するグループには、当時、久馬一剛、高谷好一、福井捷朗、海田能宏、山田勇の各氏がおられ、その後、農学部から渡部忠世先生や古川久雄、田中耕司の各氏が来られた。直属の上司ともいうべき高谷教授に、赴任早々、私は何をすればいいかという愚問を発した。「君はまず、学位を取ればよろしい」とだけ高谷氏は答えられた。私は唖然とするとともにホッとした。助手は、大学ではふつう、かなりの雑用をさせられる。センターでももちろん皆無ではなかったが、自然系の場合、上からそのような仕事が回ってくることはほとんどなかった。ある日、サロンに行くと、高谷教授が黙々と白紙に線引きをしている。「何をしてるんですか」と聞くと、公用車の使用予定表作りだという。「そんなこと僕らがやりますから」というと、「こういうことは教授に任せて、君らは研究をしてたらいい」と宣われた。私はセンターに来てつくづく良かったと思った。

というわけで、私はセンターが看板にしていた学際的地域研究にはほとんど貢献することなく、ひたすら専門の気象・気候の研究をやっていた。しかし、地域研究を、情熱的に、個性的に、しかも学際的に進めているセンターの人たちからは、非常に多くのことを学ぶことができた。渡部先生をリーダーとするアジア稲作農耕文化の起源と発展に関する共同研究には、私も一部参加させていただき、研究の視野を大いに広めることができた。

皮肉なことに、現在、私は、GAME という東南アジアの気候と水循環を中心テーマのひとつとする大がかりな国際共同研究を進めている。人間活動を含めた学際的な地球環境研究にも足を突っ込んでいる。20年経った今、センターで受けた「洗脳」の効果が、ようやく現れてきたのかもしれない。

（1977.4～1982.3 東南アジア研究センター助手。現在筑波大学地球科学系教授）

人　事

■外国人研究員

・Deanna Gail Donovan（アメリカ合衆国)。イーストウェストセンター研究員。招へい期間2001年5月7日～11月6日。研究題目「東南アジア山地部における森林依存社会の発展と森林産物の潜在的役割」

・Filomeno Aguilar（オーストラリア)。ジェームスクック大学講師。招へい期間2001年7月10日～2002年1月9日。研究題目「移民と国家：フィリピン史における移民受入と送出」

・Darunee Tantiwiramanond（タイ)。女性活動研究所所長。招へい期間2001年7月16日～2002年1月15日。研究題目「インドシナにおける女性の経済活動」

・Alex John Ulaen（インドネシア)。サムラトランギ大学講師。招へい期間2001年10月16日～2002年4月15日。研究題目「北スラウェシ州サンギール・タラウド地方の物質文化と生活様式」

・Leng Ten Moi（マレーシア)。マレーシア国民大学図書館司書。招へい期間2001年10月16日～2002年4月15日。研究題目「日本からマレーシアへの技術移転：書誌」

■招へい外国人学者

・Colin G. Nicholas（マレーシア)。オラン・アスリ・センターコーディネーター。2001年10月1日～31日。「先住民リーダーと先住民社会の周縁化」

バンコク連絡事務所だより

バンコクオフィスを大陸部研究の拠点に

河野　泰之

連絡事務所のこれからについて考えている。初めてバンコクオフィスに駐在してから12年が経過した。オフィスについて考えるときに、この12年間のもっとも大きな変化は研究対象となる地域の変化だと思う。当時、所員の研究地域は、東南アジア大陸部ではタイに集中していた。ところが1990年代前半からベトナムでの臨地研究が活発になり、それにラオスやミャンマーが続いた。カンボジアでの本格的な調査も近いうちに始まるであろう。私の今回の駐在は4カ月が経過したところであるが、この間、ベトナムへ1回、ラオスへ2回、ミャンマーへ2回、出張した。期間は最長で2週間、最短で日帰り。目的はフィールドワークや現地研究者とのワークショップ、大学院生の現地調査手配などである。まさに私たちの活動がタイ以外の大陸部諸国に拡大していることを反映している。

とはいえ現在のセンターは、資料と人材に関して、大陸部ではまだタイに偏っている。現地語資料のほとんどはこれまでタイで収集されてきた。センターにはビルマ語を話せるスタッフがいない。このような状況を改善するために、バンコクオフィスを大陸部研究における資料収集と人材育成の拠点に育てていきたいと思う。

具体的な方策は以下の通りである。資料収集については、すでに昨年度から、オフィスに送金される現地語図書費を他の大陸部諸国でも使えるようになった。次にすべきは、駐在者の資料購入のための域内出張手続きの簡略化である。またオフィス運営費をタイ以外の大陸部諸国で支出できるようになれば、それぞれの国における研究拠点（ブランチオフィス）形成につなげることができる。このようにして収集した資料の書誌情報の登録は、客員研究員のSompongさんが開発してくれた登録・検索システムを利用して、京都で管理しているデータベースにアクセスすることによりバンコクオフィスで行うこともできる。バンコクならば、京都でよりもずっと安価にできるし、図書室の仕事量軽減にも貢献できる。研究拠点形成を実効あるものにし、かつ人材を育成するために、ブランチオフィスに非常勤研究員を派遣しよう。非常勤研究員は資料収集を補助するとともに、自らも長期滞在型臨地研究に取り組むことができる。さらにバンコクオフィス駐在者と協力して、大学院生のフィールドワークをサポートすることもできる。

とりわけ制度的に、いくつかの障壁があることは分かっているが、少しずつ動かしていきたいと思う。

（センター助教授）

東南アジアセミナーに参加して

充実した５日間

武内　彰子

私は、東南アジアの芸術に関心があり、より広い視野でものをみることができるようになりたくてセミナーに参加しました。今回、様々な視点から東南アジアについて考えることができ、多くの新たな発見がありました。内容の充実さはもちろん、方法論について、研究や調査するということについて、より個人的な意見も聞くことができて大変貴重でした。

「誰が誰のために何のために“歴史”を書くのか」今回のセミナーに参加して、一番答えるのが難しいテーマだと思いました。ここでいう“歴史”というものは、国家の枠組みをはずした、地域固有の時間を持つ歴史であり、個人レベルで捉えた歴史ということになります。これらのことを考えることは、何のために研究をするのかという最も根本的なことを追求することにもなります。研究対象と自分との関わりについて改めて考える機会となりました。

また、討論に関しては反省すべき点が多くありました。自分の知識不足から躊躇してしまったり、聞きたいことを明確に聞くことができずもどかしく思ったり、セミナーの前半は焦りがありました。

毎日様々なテーマに関して、初めて知ることも多く、その理解に追われてしまい、限られた時間のなかで自分の意見を確立していく余裕がありませんでした。細部にこだわり、討論の場を持つ意味などの全体像が見えていなかったと思います。受身で聞いて感心するのではなく、内容をふまえた上で、より大きな共通のテーマについて全体で一緒に考え、もっと討論していけたらセミナーもより活気があるものになると思います。自分が最も聞きたいことを明確に相手に伝えることの大切さを改めて痛感したので、今後、改善し訓練していきたいと思っています。

このような葛藤の中でも、多分野の方々と意見交換を行うのはとても新鮮でした。参加者の皆さんにとってもそれぞれの関心や研究に対する意識の活性化につながったと思います。セミナーを通して、多くの人と意見交換をしながら一緒に考えて模索していくという姿勢の大切さを知りました。まず自分の思っていることを表に出すことで、そこからフィードバックが起こり、お互い多くのことを得ることができるのだと思います。

また見方を変えればちがった面が見えてくるということを改めて知り、自分の専門性に磨きをかけながらも、学問の枠組みを越えて全体像を捉えることができるようになりたいと思います。

今回のセミナーでお世話になりました先生方、院生の方々、そして全国から集結し出会えた受講生の方々、どうもありがとうございました。これからも東南アジアセミナーの歴史が築かれていくことを願っています。

（西南学院大学大学院文学研究科）

坪田　寛

歴史学や地域研究は専門外の私が今回、「東南アジアの歴史万華鏡」と銘打たれたこのセミナーに参加させていただき、特に次の二点が個人的には勉強になった。一つは歴史学においていかに史実を検証するかという方法論、もう一つは、地域研究を進めるにあたってのさまざまなアプローチを学べたことである。財務、金融論など結果が数値化できる分野を専門にする私にとっては、地域研究や歴史学の専門家が自らの試論に論理的客観性を与えるため駆使している技術、方法は、非常に参考になった。同時に地域研究は「Science」というよりは、「Art」であると改めて感じた。

地域研究における学問的アプローチを多角的に学べたのも非常に有益であった。経済学を専攻した者は、どうしても地域研究を開発経済学、社会学の延長線上の学際分野として捕らえがちである。しかしながら今回の自然環境学などの視点からのアプローチは、特に新鮮に感じた。職場においても専門分野の細分化が進む今日、大学、大学院、そして十数年をそれぞれの職場で過ごすと、無意識の間にも、物の見方、分析方法等がそれぞれの分野に最も適応した形で固定化してしまう。それらを意識的に「破壊」するために今回のセミナーに参加させていただき、自分にとっての目的は大部分達成できたと満足している。（自己満足？）

・セミナーの内容、運営方法について

セミナーの内容、運営方法は、大変よかったと思う。セミナーのテーマを狭義なものに限定すると参加者のプロフィールが画一化されてしまい、視野の狭いものになってしまう。また、セミナーの個々の内容を深く掘り下げるため期間を更に延長すると、社会人の参加できない学部教育の延長のようなセミナーになってしまうと思う。来年、さらにより良いセミナーを企画するのは、簡単なことではないと思いますが、セミナー委員の先生方、がんばってください。

（世界銀行シニア・フィナンシャル・オフィサー）

＜センター来訪者＞

5月22日Mr. Mohammed Tamiz Uddin Khan（バングラデシュ農業普及部技官）他9名▽5月28日Dr. Alex de Voogt（ライデン大学アジア・アフリカ・アメリカインディアン研究所国際交流担当官）▽5月29日Prof. Husni Tanra（ハサヌディン大学大学院プログラム研究科長）、Prof. Ananto Yudono（同副研究科長）▽6月8日Dr. Rustam Khomuradov（サマルカンド国立大学学長）、Dr. Shahriyor Safarov（同副学長）他1名▽6月21日Mr. Ai-Qing Zhou（湖北省稲研究所研究助手）他6名▽7月4日Prof. Kazi Shahidullah（ダッカ大学教養学部長）

＜事務官人事＞

□末光史子会計掛事務官は医療技術短期大学部会計掛に配置換。後任に髙田早津紀総合人間学部・人間・環境学研究科総務掛主任（10月1日付）。

◎"Bornean Borderlands in Perspective" by *Ishikawa Noboru*, April 26, 2001.

By examining the one-hundred-year history of a Sarawak Malay society adjacent to the Sarawak (Malaysia)-Kalimantan (Indonesia) border in western Borneo, I discuss the marginality of frontier Malay peasants, their displacement and their exclusion from the nation and the state system. By focusing on the impact of political power play for over a century at the borderlands, I attend to the process of economic and cultural dislocation of the peasantry. I give particular attention to change and persistence in elements of socio-cultural expression of the hinterland Malays in the context of the invention of "Sarawak Malay" as an ethnic category, the impact of modern market forces, and the consolidation of state power.

The basic premise of my analysis is that the emergence of a political and economic center-periphery relationship under a state system with fixed territoriality is a prime factor in creating a culturally invalidated and disempowered peasant class. While the discussion is grounded in a particular example from the frontier region in western Borneo, the issue is general, and my argument is intended to raise questions for the comparative analysis of peripheral capitalism, state formation, and class and ethnic configurations under colonial and post-colonial polities.

Colloquium

◎"Myanmar Forestry: Past, Present, and Probable Future" by *Saw Kelvin Keh*, May 24, 2001.

Scientific forestry started with Brandis in 1856 and resulted in the Myanmar Selection System. The British had ruined the Tennansarim forest during the first Annexation (1826-52) by giving free rein to timber contractors. There were also mistakes made in teak thinning and in turning the teak plantations into natural forest after the last heavy thinning had been implemented.

After Myanmar's Independence in 1948, European contractors continued to work in the country until 1952, when their work was taken over by the State Timber Board (STB), which was subsequently transformed into the State Timber Corporation (STC) in 1972 and the Myanmar Timber Enterprise (MTE) in 1989. There was a severe conflict between the Extraction Agency and the Forest Department, and an attempt to merge the two into one department by the Director General, Prof. U Kyi, failed.

As to the probable future of Myanmar forestry, the following important policies should be considered and implemented:

(1) The present silvicultural management should be modified in accordance with new scientific and research findings pertaining to Myanmar's forest situation, especially teak;
(2) Privatization or at least semi-privatization of teak should be seriously considered for future development;
(3) Effective protection for forests and forest products in transit and protection against forest fires and shifting cultivation are urgently needed. The future depends upon the rigid implementation of forest laws and rules and the participation of the rural population in forest management.

◎"Theravada Buddhists in Mainland Southeast Asia: The Regional Variety of Practices in Comparative Perspective" by *Hayashi Yukio*, June 28, 2001.

Theravada Buddhism, which originated from the Sinhalese Mahavihara sect in the area, played an important role in the definition of classical Southeast Asian states. Having developed within the historical intercourse between different language groups, Theravada practices vary from one region to another. This is also true of the textual tradition. Since the Pali language does not have its own script, it has been written in the script of each ethnic group. Numerous "sects" among Theravadins are based not on differences in doctrine, but on practices involving ways of pronouncing Pali stanzas as well as ritual behavior, which have been configured in the historical process of localization.

The regional variety of practices, including the pattern of ordination, were shown and interpreted based on field surveys in the Lao P. D. R., Cambodia and Xishuangbanna, southwestern China, where Buddhism has temporarily been persecuted due to war and socialist regimes. Such lay practices embedded in regional experiences more often than not look quite deviant from the perspective of institutionalized Buddhism today. However, regional practice has its own relevance as a Buddhist activity even if it might be considered "invalid" by some "official" interpretation of Buddhism. To consider Theravada Buddhist cultures in comparative perspective directly means to understand the dynamics of knowledge and practice among Theravadins who constitute the regions as result of their interactions.

◎"Trade Unions in Democratizing Indonesia: Enterprise Unions and Community-based Unions — Uprising or Formal Institutionalization?" by *Mizuno Kosuke*, July 11, 2001.

One of the most striking changes in Indonesian society since the passing of the New Order has been the recognition of labor's right to organize, occasioned by the ratification of ILO Convention No. 87 after President Soeharto's resignation in May 1998, and the subsequent birth of so many labor organizations.

Current field research on these labor organizations has yielded the following tentative findings:

(1) Many newly born trade unions take the form of general unions, and the mixed form of general unions and industrial unions. They are quite different from the enterprise unions of the Soeharto era.

(2) General unions tend to develop from the bottom up and to be based in the laborers' residential communities.

(3) Trade unions have focused on implementing formal individual labor contracts and on improvements in wages and welfare, rather than pursuing worker control over the production process.

(4) Antagonistic relations are largely the heritage of the Soeharto regime. While development of the legal system is crucial, the tradition of uprising and repression isn't easily replaced by formal institutionalization and labor peace.

◎"Individual-Oriented and Community-Oriented Farming Techniques: A Comparison of Crop Management" by *Tanaka Koji*, September 27, 2001.

Why did intensification and diversification of agricultural production occur more quickly and widely in Asian rice-growing regions than in other regions during the last two to three decades of modernization in developing countries' agricultural systems? I dealt with this question by comparing differences in the discipline of crop management between rice cultivators in the East and wheat/barley cultivators in the West.

Rice growers in East and Southeast Asia have developed a variety of farming techniques focusing on individual hills, as opposed to the community perspective of wheat/barley cultivators. Transplanting seedlings is universal in rice cultivation while direct seeding is common for wheat and barley. The growth of the rice crop is then traced through careful observation of the hill as a unit of cultivation and often compared to the growth stages of human beings. The discipline of such meticulous care in crop management plays an important role when new technologies are introduced and disseminated. Various examples of individual-oriented farming techniques in rice cultivation show that understanding rice culture as an individual-oriented type of agriculture may widen the scope of current agricultural development in Southeast Asia.

研　究　会　報　告

◆ Special Seminar
6月14日Abdul Halim（センター外国人研究員）Comparative History of Agricultural Extension in Southeast Asia; Medhi Krongkaew（同）The Current State of Economic and Technical Cooperation（ECOTECH）in APEC▼6月21日Deanna Donovan（同）Trade: An Engine of Growth or Environmental Destruction? The Case of Non-Timber Forest Products in Southeast Asia▼7月19日Rajindra K. Puri（カンタベリー大学）The Causes and Consequences of the Trade in Cagebirds in East Kalimantan▼9月4日Neferti Tadiar（センター外国人研究員）Poetics of Adventurism and Philippine Authoritarianism▼10月5日Darunee Tantiwiramanond（同）Small-and Micro-scale Women Entrepreneurs in Changing Vietnam▼10月18日Ding Choo Ming（マレーシア国民大学）The Ups and Downs of Chinese Baba in Malaysia and Their Contribution to Pantun and Syaier Writing; Malay World Studies Database at ATMA（UKM）

◆"Core University Program Seminar"
10月10日"Study Group on State, Market and Community" Mahani Zainal Abidin（マラヤ大学）East Asian Regional Integration in the Post-Crisis Period

◆「民族間関係・移動・文化再編」
第12回研究会、6月29日
川並宏子（ランカスター大学）「ビルマ尼僧院の所有形態と発展サイクル」
第13回研究会、10月26日
岡本和之「異聞・タイ社会変化15年——1992年5月事件前後の民衆運動・中間層・知識人」

◆「国家・共同体・市場」研究会、7月10日
Manfred Steger（イリノイ州立大学）Globalism: The New Market Ideology

◆東南アジアの自然と農業研究会
第101回例会：6月22日海田能宏（センター）「農業・農村発展のアジア的パラダイム」
第102回例会：10月19日酒井章子（京大人間・環境学研究科）「東南アジアのフタバガキ林における一斉開花現象——サラワク林冠生物学研究の成果」

THE END OF "THE END OF HISTORY"

By Filomeno V. Aguilar, Jr.

In his famous essay on "The End of History," Francis Fukuyama claimed that the state founded upon liberal democratic principles represents the culmination of human political evolution. Witnessing world events in the late 1980s, Fukuyama interpreted the collapse of communism as resulting in the incontrovertible triumph of liberal democracy. Steeped in evolutionary thought, he argued that acts of violence that would remain in various parts of the world were symptoms of the struggle in those countries to achieve the same kind of polity already regnant in "the West."

The cataclysm of 11 September 2001, which saw the utter destruction of the World Trade Center in New York City and the wrecking of the Pentagon in Washington, D.C., has dealt a crushing blow to Fukuyama's vision of history. The handiwork of global terrorists, the devastation in the heartland of global capitalism and in the military nerve center of the most powerful country on earth suggests the indomitable strength of an alternative vision of human society, one evidently not founded upon liberal democracy.

Because the terrorists responsible for Terrible Tuesday are not state actors nor are they intent on founding their own state, they may be understood as the possessors and perpetrators of non-state violence. Authorities in the United States now appear to have underestimated the potency of non-state violence. Fukuyama himself cast aside terrorism from his framework of history. But 11 September has reconfigured the historical landscape, and terror has now been elevated uncritically to the level of an *ism*, along with fascism, Nazism, and totalitarianism.

Prior to that fateful day non-state violence on the magnitude of Terrible Tuesday was so unimaginable that, in its immediate aftermath, U.S. leaders have been keen to identify states aiding and abetting terrorists. Indeed, the heads of states around the world have expressed near-universal support in the fight against global terrorism. This campaign, in principle, can unify states that espouse divergent political ideals because the challenge posed by terrorists—who form a globally sophisticated transnational underworld—is directed effectively against the international system of states. Terrorists have demonstrated that the claim by states to the monopoly of the means of violence and to territorial sovereignty can be flouted with not too great difficulty. As they are all potential targets, states are in general agreement on the need to combat globalized terrorism. In the current campaign, however, strategic but comparatively weaker states are finding the opportunity to advance their own interests in exchange for cooperating with the United States. Other countries, such as the Philippines and Japan, may find an equitable platform from which they may contribute to as well as benefit from a concerted campaign against terrorism.

In the context of arguments that footloose capital is eroding state sovereignty, terrorists have demonstrated that they pose an even more pernicious challenge to the sovereignty of states. Representing the darkest side of globalization, terrorists thrive in the crevices of the interstate system while concomitantly riding upon the machinery of the world economy to lubricate its own operations. Indeed, the unwritten history of global terrorism would probably show that this phenomenon is as much a product of the interstate system, and of the rivalries and iniquities within it, as it is of opposing visions of social life.

Now that the genie-monster is out of the bottle, national security may become an overriding issue in international relations and may dictate the parameters of future economic and political globalization. One could only hope that the multilateral response to terrorism would include the redressing of the iniquities of the interstate system so that the cracks where terrorists insinuate themselves will no longer be fertile ground. The dominant states in the world system will also have to lead the way in the ethical, restrained, and reasonable use of the means of violence at their disposal in the campaign against terrorism.

After 11 September, the 21st century has become an epoch fraught with great uncertainty. The biblical prophecy of turning spears into plowshares, appropriated by the United Nations as its motto, will probably continue to groan for fulfillment as states pursue their own geopolitical interests. But ordinary individuals must remain undaunted. Personally, my Christian faith prompts me to be hopeful amid evil, without harboring unrealistic expectations. Whatever our individual creeds, we all can do our share in seeking peace, even if this quest remains elusive.

(Visiting Research Fellow)

LESSONS FROM NATURE

By Deanna Donovan

It was the evening of September 10th when I thought, well, it's about time that I sat down and wrote my 500 words for the CSEAS Newsletter. I concluded that tomorrow night would be a good time for the job. The topic I had selected was nature—a naturalist's impressions of Kyoto. As a person who appreciates very much both urban and country life, I enjoy immensely the little bits of country that survive in the city. The parks and gardens of Kyoto, even the small boxes that people carefully cultivate at their entryways, are to me a special treat. In addition to the excitement of discovering new species unique to Japan, such as the wild red spider lily, there is the pleasure of encountering many familiar temperate species. It is like seeing "old friends," many of whom I have not seen in years, since moving to subtropical Hawaii. The following morning as I walked to work along the river, I reveled in the newly sprouted grass and flush of new leaves on the bushes, ample proof of their appreciation of the sumptuous rain lavished on the city by the most recent typhoon. The weather was perfect—a bright, sunny day with the coolness of the shadows betraying only the barest hint of oncoming autumn. An absolutely perfect day—for a brief moment I thought I should cut work, but no, I really had too much to do.

When I got to my office, this perfect world was shattered. It was September 11, and the news of my home country, the United States, was broken to me in an email message from my brother, frantically trying to contact all family members. The news of the multiple plane crashes was terrible beyond belief. Suicidal hijackers attempting to make a political statement had committed to a fiery death thousands of innocent people. Even after I learned of the safety of all our family in New York and Washington, D.C., I could not stop thinking about the disaster and its victims. I could not write; I could barely read, that day or the next.

Now, one week later, although still somewhat stunned, I walk along the river again and take solace in the observations of the previous week. Nature's resilience is a marvelous thing and a message of hope to all. The planners of Kyoto's river corridor probably did not have this consideration in mind when they designed this park. Most likely, they focused on much more practical objectives—accommodation of flood waters, the spillover of shoppers from the Sanjo area, relief of pedestrian traffic along Kawabata-dori, and so on. However, it is as a largely unmanicured, natural space, an almost wild place, that this park may play its most important role. For despite recurrent floods and desiccation, the riverside vegetation and its associated population of wildlife—birds, frogs, turtles, lizards—revive and recolonize this site. Its resilience in the face of repeated assaults is an apt lesson for us all. Constant yet changing, the river corridor is an anchor for the city and an area of recreation, reflection, and refuge for citizens and visitors alike. Despite all the incredibly beautiful temples, shrines, gardens and other of mankind's creations that one can enjoy in Kyoto, the river corridor will certainly be one of my favorite and most enduring memories of this city. (Visiting Research Fellow)

MY FIRST *ZAZEN* IN JAPAN

By Darunee Tantiwiramanond

The large *kanji* word "Zen" stood out among the cluttering ads on the information board at Shugakuin International House. Guessing from the scattered *kanji* on the page, I understood that . . . here is the phone number to call to participate in a *zazen* session at Daitoku-ji Temple . . . .

I first learned about Zen in the 1970s during my undergraduate years in Thailand. Many translated *haiku* and Zen riddles were popular among students. Zen thoughts also influenced the work of the late Buddhadasa Bhikku, who was accused of being a communist by the late Prime Minister M. R. Kurit Pramoj during the witch hunt period of Vietnam War. The Monk's preaching and reflective writing on anti-consumerism and anti-individualism/egoism was deemed too radical at that time. He advocated going back to the basic simplicity of the *sangha*, tirelessly reinterpreted the Buddha's messages, and denounced the popular rituals of producing Buddha images and amulets. The Thai authority failed to get rid of the Monk, and, increasingly, university students began to follow his voice. Major universities like Chulalongkorn, Thammasat, and Chiang Mai began to organize summer retreats taking students to practice meditation at Suan Moke, the forest monastery he established in his home village in southern Thailand. I joined the retreat when the monastery had only one "Spiritual Theatre" building in the middle of the wild forest. The "Theatre" was full of Zen-inspired wall murals.

Unlike the Suan Moke that I knew, Daitoku-ji is located next to the bustling street of Kitaoji not too far from Shugakuin. The neighborhood of the temple has developed into a series of tiny traditional restaurants serving the vegetarian cuisine *shojin*

ryori, the delicate *tofu*-based food varieties innovated by Zen monks. The temple appears to be slightly crowded with buildings. Later I realized that it was more crowded before the anti-Buddhism of the Meiji Period. Daitoku-ji was founded in 1333 and gained a status of an imperial temple. After total destruction during the Onin Wars, the temple was reconstructed in 1470. The *samurai* class generously patronized the temple. Powerful families built sub-temples inside the vast temple ground for family ancestral worship. The number reached the 80s but reduced in the Meiji Period to the 20s as it is today.

Our group was led to the Hoshun-in Temple, one of the remaining sub-temples. It was built in 1608 by the wife of Toshi-ie Maeda, a local lord, to worship the Maeda ancestors. Everything in the temple appeared ancient and traditional except the toilets—separate for men and women—equipped with clean, modern Western-style facilities. The organizers gave us instruction with pictures on how to sit in full or half lotus. The sitting was made much easier here with the help of two cushions—one fat round bun-like cushion on another flat thin larger square cushion. The long *zazen* hall is surrounded by sliding paper doors, and the floor covered with *tatami* mats. I happened to sit in front of two open doors from where I could see the rock garden in the backyard. The open doors served as a postcard frame of the scenic garden highlighted by a modest shrine accompanied by a standing rock lantern.

The priest gave some instruction in Japanese translated into English by a shy Japanese male student. The priest then rang his hand bell four times, pausing long enough between each ring to count slowly from one to ten. It was the rhythm we were supposed to keep while sitting in full or half lotus posture with eyes half closed. Then he clapped the two small wooden slaps together to indicate "start."

We sat quietly for 20 minutes. I did not count from one to ten as instructed, but followed my breath and my mind as I learned from Suan Moke. The whole atmosphere was calm and peaceful. I felt the presence of nature. I could hear the faint noise of water flow in the garden stream, far away bird calling, and gentle breeze passing through the doors. But the tranquility could not stop my mind from thinking about the hellish horror suffered by New Yorkers after the terrorist attacks a few days ago, of the Iraqis in the Gulf War ten years ago, of the Japanese in Hiroshima and Nagasaki after atomic bombs half a century ago, and.... The loud noise of wood clapping and hand bell brought back my mind to the present.

The priest then led us in walking meditation for one round clockwise on the *tatami* mats. We took our seats and began another 40 minute sitting, followed by another round of walking. Before ending at noon, the priest opened the floor for questions. I was surprised and impressed to see most westerners could speak in Japanese. Unable to understand the conversation, my mind wandered off to a Zen fable in which the Master told his disciple to go listen to the trees in the garden instead of asking questions.

The story of popular Zen began with two famous poems. One says, "The mind is like a mirror, keep polishing till it shines." The other says, "No mind, no mirror, no polishing." Maybe we still need to polish our minds, until one day we realize how precious is our short span of life, and how precious are others... and as is every being. Then we will know how to "act" mindfully rather than "react" with rage in the age of increasing globalization of violence. Peace will begin only by developing right perspective and sharing prosperity.

(Visiting Research Fellow)

センター人の動き

林行夫（2月10日〜5月7日）タイ「タイ仏教と地域間関係の調査」▽河野泰之・柳澤雅之（2月12日〜25日）中華人民共和国「中国南部辺境地帯の農業開発に関する資料収集」▽白石隆（2月18日〜3月6日）タイ他「東南アジア地域編成に関する講演等」▽安藤和雄（2月19日〜3月4日）ミャンマー「バングラデシュとミャンマーの少数民族の持続的農業と農村開発に関する調査」▽松林公蔵（2月20日〜3月3日）ミャンマー「ミャンマー国高齢者の調査」▽立本成文（2月23日〜3月8日）ベトナム「研究ネットワーク構築の打合せ」▽海田能宏（2月25日〜3月6日）バングラデシュ「住民参加型農村開発行政支援計画に関する共同研究」▽石川登（2月25日〜3月25日）マレーシア「サラワク州ビンツル、クムナ川流域社会の木材産業に関する調査」▽P. Abinales（2月25日〜3月28日）マレーシア他「知的ヘゲモニーの構造（仕掛け）：テクノクラシーに関する意見交換」▽水野広祐（2月26日〜5月14日）インドネシア「ジャカルタ事務所管理運営等」▽濱下武志（2月28日〜3月11日）香港他「アジア開発都市会議、インドの中国会議出席」▽吉原久仁夫（3月1日〜9月30日）マレーシア「グローバリゼーション対応のあり方に関する研究」▽阿部茂行（3月4日〜7日）タイ「東南アジアの中の日本：マレーシアとの戦前の貿易と投資関係に係る国際会議参加」▽柳澤雅之（3月10日〜25日）ベトナム「ベトナム北部デルタ及び山地の土地利用変遷に関する資料収集」▽安藤和雄（3月10日〜25日）バングラデシュ「バングラデシュとミャンマーの少数民族の持続的農業と農村開発に関する調査」▽吉村充則（3月10日〜24日）マレーシア「熱帯雨林の林冠研究に関する国際シンポ参加」▽木谷公哉（3月12日〜17日）インドネシア「コンピュータの環境調査と改 ↗

海外調査だより
Fieldnotes

Caroline S. Hau

Over a two-week period from late September to early October, I traveled down the eastern length of Mainland China – from Beijing to Shanghai to Guangzhou to Xiamen – in search of Returned Overseas Chinese (*guiqiao*) who had formerly been based in the Philippines.

The men and women I interviewed ranged in age from their early sixties to their late eighties. Most of them grew up in the Philippines, but chose to go back to China at different but no less crucial times in both Philippine and Chinese history – the Sino-Japanese war in the 1930s, World War II and the Chinese civil war in the 1940s, the Cultural Revolution in the latter half of the 1960s, and the waves of persecution and anti-Chinese legislation under Philippine presidents Manuel Roxas, Ramon Magsaysay, and Diosdado Macapagal throughout most of the post-war period.

These *guiqiao* would for most of their lives serve as "cultural workers," as journalists, reporters, scholars, editors, translators, and writers. Some of them were ranking officers of the Communist Party of China and served as government officials on the provincial level. A number of them, especially those in Fujian and Guangdong in Southern China, suffered greatly during the Cultural Revolution; they, along with other Overseas Chinese, were lumped under one of the "seven categories of sinister people" alongside landlords, rich peasants, counter-revolutionaries, bad elements, rightists, and enemy agents. One, a leading writer whose spoken drama was praised by Premier Zhou Enlai, was sent to Gansu and Hunan provinces for ten years of hard labor and "re-education." Remarkably, none of them harbored any real bitterness or regret about the subsequent hardships they suffered in China. And all of them, without fail, look back to their sojourn in the Philippines with great fondness, even nostalgia.

The lives and narratives of these Philippine sojourners are instructive in that they reveal the extent to which the making and remaking of national communities depend in part on people's historically situated experiences of the "outside" and the "inside." The idea that to be Chinese also admits the possibility of being other-than-Chinese can be a source of deep uneasiness in a world that operates on the basis of the assumed boundedness and integrity of "national" (if not "cultural") totalities. Yet the act of movement across national borders has always had political and cultural significance.

My research is about overseas Chinese patriotism and its contribution to the making of national communities in China and in Southeast Asia. Posing the fraught question of the wandering "self" within the framework – both experiential and conceptual – of the nation, it asks: How does one come to love one's country when one is somewhere else? How does one fall in love with a country for love of another?

My research takes up historian Wang Gungwu's call to give overseas Chinese response to nationalism a place in the contemporary history of Southeast Asia by looking into the forgotten history of the patriotic Chinese and examining the political salience of a revolutionary *huaqiao* (overseas Chinese) nationalism that has been marginalizd from most histories of Southeast Asia. It sets out to interrogate not just the borders of patriotic love, experience, and memory, but of scholarly inquiry as well, which, given its restrictive reliance on the given boundedness of the nation-state and the discourse of citizenship as units of analysis, has elided the contribution of *huaqiao* nationalism to the shaping of both Chinese and Southeast Asian histories.

(Associate Professor of CSEAS)

↘ 善に関する資料収集」▽松林公蔵（3月13日〜21日）ベトナム「ハノイ近郊在住高齢者の健康法に関する予備調査」▽速水洋子（3月15日〜27日）タイ他「国際ワークショップ『大陸部東南アジアと南西アジアにおける民族間関係と地域の形成』参加」▽山田勇（3月15日〜28日）ミャンマー他「研究ネットワーク構築の打合せ」▽阿部茂行（3月23日〜31日）アメリカ合衆国「アジアと日米欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究」▽立本成文（3月23日〜29日）ミャンマー「研究ネットワーク構築の打合せ」▽木谷公哉（3月27日〜31日）タイ「コンピュータネットワーク環境改善に関する設備更新」▽河野泰之（4月8日〜13日）ミャンマー「ミャンマーの農村開発に関する調査」▽濱下武志（4月22日〜28日）インド「アジア海洋史会議参加」▽P. Abinales（4月30日〜5月8日）アメリカ合衆国「国家改革過程における軍事に関する調査」▽河野泰之（5月3日〜10月1日）タイ「環境資源の総合的評価と管理に関する調査」▽五十嵐忠孝（5月8日〜11月3日）インドネシア「ジャカルタ連絡事務所管理運営等」▽A. T. Rambo（5月19日〜6月11日）ベトナム他「自然環境のデータ収集、土地利用土地劣化の研究・指導」▽西渕光昭（5月21日〜30日）タイ「腸管感染症発生状況と環境からの原因菌の分離状況に関する情報収集」▽吉村充則（6月5日〜21日）マレーシア「熱帯雨林の林冠構造計測」▽阿部茂行（6月7日〜14日）マレーシア他「COE 図書資料収集とネット ↗

◇『東南アジア研究』39巻1号

〈特集〉20世紀メコン・デルタの開拓

「序」髙田洋子▼「海岸複合地形における砂丘上村落の農業開拓」髙田洋子▼「広大低地氾濫原の開拓史――植民地期トランスバサックにおける運河社会の成立」髙田洋子；ピエール・ブロシュ▼Canal Development and Intensification of Rice Cultivation in the Mekong Delta: A Case Study in Cantho Province, Vietnam. Kono Yasuyuki▼「メコンデルタ地方都市近郊村落の農業変容――ロンアン省タンアン市カインハウ社ジン集落の事例」桜井由躬雄▼「カィンハウ行政村における集団化の事例報告――集団化期における家庭経済の変化について」大野美紀子▼「集団化期解体以降のカインハウ社における農業賃労働の実態に関する一考察」岩井美佐紀▼Agricultural Development in the Broad Depression and the Plain of Reeds in the Mekong Delta: Conserving Forests or Developing Rice Culture? Tanaka Koji▽書評 Lee Kuan Yew. *From Third World to First: The Singapore Story, 1965-2000.* 吉原久仁夫

◇『東南アジア研究』39巻2号

The Vietnam War and Tourism in Bangkok's Development, 1960-70. Porphant Ouyyanont▼The Malay World in Textbooks: The Transmission of Colonial Knowledge in British Malaya. Soda Naoki▼「ラカイン山脈におけるサラインチン人集落の再建と焼畑によるコメ自給システム」田中 求▼「シンガポールにおける寿司の受容――寿司のグローバライゼーションとローカライゼイションをめぐって」呉 偉明；合田美穂▽書評 杉村美紀.『マレーシアの教育政策とマイノリティ――国民統合のなかの華人学校』左右田直規▼Roger Tol; Kees van Dijk; and Greg Acciaioli, eds. *Authority and Enterprise among the Peoples of South Sulawesi.* 濱元聡子▽現地通信「バングラデシュ住民参加型農村開発行政支援プロジェクト（PRDP）」海田能宏

出版ニュース

＜その他の出版物＞

■Patricio N. Abinales. 2001. *Fellow Traveler: Essays on Filipino Communism.* Quezon City: University of the Philippines Press.

■立本成文. 2001.『共生のシステムを求めて――ヌサンタラ世界からの提言』（「現代の地殻変動」を読む－3）弘文堂.

■白石 隆. 2001.『インドネシアから考える――政治の分析』（「現代の地殻変動」を読む－4）弘文堂.

↘ ワーク構築」▽北村由美（6月10日～18日）同「同」▽柳澤雅之（6月18日～7月8日）ベトナム「北部ベトナム Moc Chau 県の農業調査」▽安藤和雄（6月18日～7月14日）中華人民共和国他「バングラデシュとミャンマー周辺地域の農業開発に関する調査」▽濱下武志（6月19日～23日）連合王国「義和団研究会議参加」、（6月27日～30日）香港「東南アジア関係史会議参加」▽松林公蔵（7月3日～7日）カナダ「国際老年医学会参加」▽田中耕司（7月12日～18日）インドネシア「学術研究機関との交流事業協議打合せ」▽立本成文（7月12日～19日）同「同」▽石川登（7月12日～24日）同「同」▽阿部茂行（7月12日～8月1日）タイ「アジアと日米欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究」▽山田勇（7月12日～8月20日）インドネシア他「ウォーラシア海域の生活世界と境界管理の動態的研究」▽A. T. Rambo（7月13日～8月3日）ベトナム「ベトナム開発動向に関する資料収集・ワークショップ参加」▽柳澤雅之（7月16日～28日）ミャンマー「ミャンマー経済構造政策支援の研究調査」▽濱下武志（7月17日～21日）ベトナム「資料収集」▽水野広祐（7月18日～8月26日）インドネシア「グローバリゼーションと地方文化シンポ出席」▽林行夫（7月21日～8月3日）タイ「タイ・ビルマ国境における文化再編に関する調査」▽西渕光昭（7月22日～31日）スイス「WHO と FAO 主催食品リスクアセスメント会議出席」▽吉村充則（7月24日～8月1日）マレーシア「RC ヘリ観測事前打合せ」▽白石隆（7月25日～8月3日）インドネシア「インドネシア政治聞き取り」▽安藤和雄（7月30日～8月16日）カザフスタン「アラル海流域における大規模灌漑農業の生態環境調査」▽石川登（8月1日～9月9日）インドネシア「西カリマンタン州の労働移動に関する研究」▽濱下武志（8月2日～16日）シンガポール「華僑・印僑関係資料収集」▽阿部茂行（8月11日～9月9日）タイ他「国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済のための意見交換」▽白石隆（8月12日～9月6日）ミャンマー他「ヘゲモニーとテクノクラシーに関するデータ収集」▽北村由美・P. Abinales（8月20日～25日）フィリピン「オカンポコレクション調査・ネットワーク構築のための研究」▽A. T. Rambo（8月20日～9月24日）アメリカ合衆国「ベトナム開発計画ワークショップ参加」▽田中耕司（8月21日～9月1日）ラオス「ラオス経済政策支援調査に関する共同研究」▽立本成文（8月21日～9月8日）マレーシア他「宗教事情に関する聞取り調査・資料収集」▽吉村充則（8月22日～10月8日）マレーシア「RC ヘリによる植生観測」▽松林公蔵（8月25日～9月10日）シンガポール「在住高齢者のフィールド検診」▽安藤和雄（8月29日～9月26日）バングラデシュ「住民参加型農村開発行政支援計画に関する共同研究」▽水野広祐（9月6日～26日）インドネシア「環境調和型農村開発に関する研究」▽C. Hau（9月16日～10月9日）フィリピン「東南アジアの華僑文学とナショナリズムに関する資料収集」▽松林公蔵（9月18日～29日）モロッコ「老人問題に関する研究打合せ」

2001年11月1日発行
発　行　〒606－8501
京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学東南アジア研究センター
Tel　(075) 753－7344
Fax　(075) 753－7356
e-mail: editorial@cseas.kyoto-u.ac.jp
編　集　石川　登・米沢真理子